

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その三

「離在」と「噴泉」

高橋克己

内容梗概

人文学部独文研究室

(一) 序論 二(156)頁―五(159)頁

(二) 宥和の旋律

(1) 頭韻と詩脚 六(160)頁―七(161)頁

(2) 内省する魂 八(162)頁―一(165)頁

(三) 燈火と松明

(1) 生成と消滅 一六(170)頁―一七(171)頁

(2) 燈火と月影 一七(171)頁―二二(176)頁

(四) 思慮深い家長

(1) 緒言 二九(68)頁―三〇(69)頁

(2) 親友ランダウエル 三〇(69)頁―三五(74)頁

(3) ランダウエル絨毯毛織物商会 三五(74)頁―三八(77)頁

(五) 黄昏から聖夜へ

(1) 離在 四四(81)頁―四四(83)頁

(2) 噴泉 四五(16)頁―五〇(21)頁

Zum Verständnis dieser Arbeit 五〇(21)頁―五六(27)頁

※既刊部(一)―(四)は註解とともに、一九八五年度―八六年度・高知大学

学術研究報告・第三四卷―第三五卷、人文科学篇所収。

(一)―(三) 第三四卷、一五五頁―二〇二頁、一九八六年二月刊。

(四) 第三五卷、六七頁―一〇二頁、一九八六年十一月刊。

本論要旨

『パンとぶどう酒』冒頭は実に然り気なく歌われているが、諸表象に注意してみると、微妙な明暗が巧みに織り成されているのに驚く。まず題目すべが第一句と第二句との対比の下に浮かび上がる「燈火(Erleuchtung)」と松明(Bleuchtung)の相違であり、思想詩冒頭の導入部の動静は「燈火」の「生成」と「松明」の「消滅」により見事に彩られている。この「生成」の息吹きを伝え「思慮深い家長」(第四句)が高唱されたあと、詩想は客観性を帯びた都市生活の諸相から転じて次第に心意識の内観へと沈みゆく。

「離在」と「噴泉」は、かく深沈する詩情の流れにおいて、前者は遙か彼方へと向かう魂の放下であり、後者はその心の動きに応答する様に「滔々と湧く」と歌われる「生ける水」である。この「生ける水の噴泉」が大自然の奥底から「生成」するには、既に「孤独」な魂が「離在」へと「消滅」することを前提として九句)とは両者が相俟って、冒頭二句の「燈火と松明」に見られる「生成と消滅」に呼応すると考えられるのである。

同じ「生成と消滅」でも「燈火と松明」に比べて、後の「噴泉と離在」の場合の方が、詩情は一層と内面化されている。蓋し内面へと向かうと言うことは自閉することではなく、より広い空無へと開かれた詩想を目指すことを意味する。それは「燈火」が密やかに点る市民意識において、敢て「孤独」を天窓として「離在」の彼方に「至福なるギリシア」を探索するためであり、この魂の放下に相應しく「パンとぶどう酒」の詩想は「噴泉」(第九句末)で始めて大地の懐へと開かれる。すなわち「燈火」や「松明」に照らされた市壁の内部空間へと、大自然の奥底から「生ける水の噴泉」が進り、あたかも天高く沸き上がる祈りの歌声の如く心を「浄め」るのである。

〔五〕 黄昏から聖夜へ

(1) 離 在

『パンとぶどう酒』は第七句頭の「だが他方 (Aber)」を機に、これまで造形化された具体的で客観性を帯びた都市生活の諸相から、次第に主観性に彩られた心象へと転調してゆく。第一句の「静かに安らう都市」や「燈火のともる街路」、第二句の「松明に飾られ疾駆する馬車」、第三句の「昼間の歎びに別れを告げ家路へと歩みゆく人々」、第四句から第五句にかけての「収支得失を慮り悠然と和やかにわが家にくつろぐ思慮深い家長」、それに続き第五句から第六句までの「葡萄も花束もなく、また手仕事の品々もなく憩う広場の市場」、これらは決して単なる記述描写ではなく、現実の諸相と心の往き交う詩想である。しかしながら、此所では当時の外界が詩人の心の鏡に素直に映じ造形化されており、未だ詩情が内観に沈みゆくとは読めないのである。

ところが第七句頭からは事情が異なり、正にこの内観へと深沈せんとする瞑想への動静が明らかとなる。

七 Aber das Saitenspiel tont fern aus Garten; vielleicht, dab

八 Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann

九 Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; ……

七 だが他方、竖琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは

八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が

九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。 ……(2)

(『パンとぶどう酒』第一節、第七句―第九句)

第七句の中央部で印象深く耳に残る変母音(ウムラウト)、すなわち「響いて来る(ティント)」で強声なす「エー(ö)」の音価が注目される。なぜなら、この喉の奥から文字通り響いて来る長変母音により、今までの第六句までには聞こえて来なかった呻吟を第七句が得るからである。しかも韻律上の呻吟は、中間休止(II)の後に始めて響く強音ゆえに、十全に口籠られて発音される。

Aber das Saitenspiel tont fern aus Garten; ……

—(C)—(—)——(—)——(—)——(—)——(—)……

旋律曲線は「ティント・フェルン(önt fern)」において、悠然としたなだらかな峰を形造り、そのうち「響いて来る(önt)」の箇所が最高潮と成る。これは文字通り何処ともなき「彼方(fern)」から響き渡って来る咽喉音と考えられる。そしてこの新たな呻吟を以て『パンとぶどう酒』では、第六句まで歌われた都市像の外観に映じ出された内観が、次第に一層と心の中へと重心を移し、かくして心に移りゆく情緒の流れへと音調が転移するのである。

この内面世界への転調は第八句で歴然とする。すなわち「恋(エロース)人(ein Liebendes)」とか「孤独な者(ein einsamer Mann)」が歌われ、人の心の動きを抜きにしては考えられない「恋」とか「孤独」と云う詩歌象徴に彩られ、詩想は主情的な色調を帯びる。そして第九句では更に「彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ」(Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit)」と、意識は時空を過去への追想へと向かい、瞑想への傾斜は決定的となる。

此所で詩人の他の作品を知る者は、「若き日」の「恋」で長編『ヒュペリオン』における女性ディオティーマ像を想い起こし、「彼方の友」で親友ベラルミンを思い浮かべるであろう。

Wo aber sind die Freunde? Bellarmin  
Mit dem Gefährten? .....

だが何処に友たちはは？ ペラルミンと  
あの仲間には？ ……<sup>(3)</sup>

(ヘルダーリン「追想」第四節、第三七句—第三八句)

更に伝記に通じる者は、殊に恋愛(エロース)物語の裏付けとなる現実のズゼッテルディオティーマ体験を話題としよう。確かにそれらの関連は「パンとぶどう酒」の詩想と微妙に呼応している。しかしながら世間の巷における色恋(クビードー)に甘えた情念の燃焼へとそれを還元してしまうことは困難である。なぜなら「パンとぶどう酒」の焦眉の急は、神人キリストの大悲(アガペー)であり、この止み難い彼岸からの重力なす恵み(グラテティア)と平衡を保ち得る恋(エロース)、すなわちプラトーンが「饗宴」で説く恋(エロース)の如く倫理(エートス)意識に強く支えられた魂の空無への放下(ほうげ)にして始めて、この大悲に誠意もて応え得るからである。

この種の色恋(クビードー)ならぬ恋(エロース)としては、例えばイタリアのマントヴァで一六〇七年に初演されたモンテヴェルディ作「オルフェオ」における、古代ギリシア神話上の歌人オルペウスと妻エウリュディケトの物語を念頭に置くことが出来る。実にこの歌人オルペウスこそは、「パンとぶどう酒」第七句に云う「竖琴(Das Saitenspiel)」の名人として古来称えられた「恋(エロース)人(ein Liebendes)」であり、この「竖琴」のみを頼りに亡き妻エウリュディケを慕い乞い求め、敢て冥府(ハーデース)へと招魂すべく降りていったのである。

その様は恐らく「パンとぶどう酒」終結部で歌われている詩歌象徴に一脈通じるであろう。

Sanfter träumet und schläft in Armen der Erde der Titan,  
160 Selbst der neidische, selbst Cerberus trinkt und schläft.

和やかに夢みて大地の腕で、かの巨人(ティタン)が眠る、  
160 かの嫉み深い(冥府の番犬)ケルベルスさえも甘露に眠っている。<sup>(4)</sup>  
(「パンとぶどう酒」第九節、第一五九句—第一六〇句)

「パンとぶどう酒」では酒神ディオニューソスの葡萄酒の酔いが番犬ケルベルスを眠らせるのに対し、オルペウス神話では冥府の渡し守カローンが歌人の竖琴の音に酔い眠ることになる。このように情景は異なるが、冥府へ赴くと云う基調、すなわち生者の圈内から死圏への動静には変わりがない。そして正にこの点においてオルペウス神話は「パンとぶどう酒」に関連すると言えよう。

本論が話題としている「恋人」(第八句)の「恋(エロース)」も、恐らくこの脈絡で考えるのが妥当であろう。つまりこれを単に此岸の現実における充足追求と看做すことは難い。まず何より詩歌の調べがこれを証する。既に述べたように第七句の「竖琴の音」は、何処ともなき遠い「彼方から響いて来る(テイント・フェルン)」のであり、この強声なす「彼方(fern)」の響きを静聴せずに、これを文字通り「彼方の庭園から(fern aus Garten)」とのみ解しては杓子定規であろう。故に第八句の「恋人」や「孤独な者」も、文字通り「そこ(dort)」に居る点に気を取られていては、十分に詩想を汲み取ったことにはならないと考えられる。なぜなら「恋人」も「孤独な者」も、「そこ」に居て実は「そこ」に居ないが如き「恋(エロース)」と「孤独」に本質を有しているからである。

Ferner Freunde gedenkt .....

彼方の友を想いつつ、 .....



「マー・マン」と考えられる。殊に形容詞「孤独(アインザーム)」の強声部「アイン」の部分は、先行の不定冠詞「アイン」と同音なので、この同音の重複により一層と際立って印象深く響くと思われる。他方これに比べると句中の「恋人(アイン・リーベンデス)」の部分は、律動の上で余り重きを成さないと看做される。従って、当面の魂の動静は「恋(エロス)」よりも「孤独」に在ると云うことになり、「恋人が奏で」(第八句中)よりも「孤独な者が(ein einsamer Mann) / 彼方の友を(Ferner Freund)」(第八句―第九句)にむしろ重心が懸かるのである。ところで「孤独」を単に心理上の事実と考えるならば不十分であろう。なぜなら「パンとぶどう酒」の詩想は、「淋しい」とか「一人ぼっちだ」などと云う巷の感傷や感慨で量るには、余りに慎ましい謹厳さに満ちている。つまり直接そのような心の動きが表立せず、情念(パトス)は目立たず意識の水底を悠然と力強く流れている。この「生ける静謐(Lebendige Ruhe)」を誘うのが「豎琴の音(Saitenspiel)」(第七句)であらうと思われる。

彼方から耳にするだけで、たとえ嘆き悲しんだ折として、

豎琴の音と歌声は、私の心を直ちに黙させる。

(ヘルダーリン「気むずかしい人々」第一節、第一句―第二句)

「豎琴の音(Ψαλμός)」とは文字通り「詩篇」の聖歌(Psalms)に通じ、この謹厳な「旧約聖書」の慎ましくも力強い調べが苦難の民の心を支える様に、歌心に静かに働きかける楽音と考えられる。故に「孤独」(第八句)とても敢て外に心情吐露されるのではなく、むしろ内に籠もり魂の水底へと沈潜し、この深沈の「彼方」に始めて問われ得るのである。

「彼方」とは何処か或る所と云うことではなくて、何処でもない「彼方」すなわち空無の彼方と考えられる。と言うことは決して次のような晴やかに「光の上高く」と歌われるような目先の「彼方」ではない。

そしてさらにや高く光の上に、いと浄らの至福の神は住んで聖なる光の嬉戯を喜ぶ。ひそやかに神はひとり住む、その容貌明らかくエーテルの世界より生命を授けんと身をかがめ、つねにつねに喜びをわれらが上に創り出さんとする。

(ヘルダーリン「帰郷」第二節、第二句―第四句)

此所に歌われている「至福の神」に関して手塚富雄註<sup>1)</sup>では、「パンとぶどう酒」第四節の第六五句等に見られる「父なるエーテル」と同義であると説明されているが、筆者はこの解を支持できない。なぜなら、この「父なる神気エーテル(ギリシア風にはアイテル)」へと至る「至福なるギリシア」(第五五句以下)の詩想の基調が、「空無を孕む内面の飛翔」に他ならないと私には思われるからである。

当該の「孤独」(第八句)の基底にも、この空無を孕む心魂の「彼方」への放下が私には見える。詰まる所この「彼方」とは「至福なるギリシア」として西欧キリスト者の意識に過去の死圏から立ち現われることになるが、此所で「至福」とは正に西欧キリスト教の擡頭と共に没落した故にこそこう呼ばれるのであって、決してその心意識に呑み込まれ古典古代として珍重され、「そしてさらにや高く光の上に、いと浄らの至福の神」(註(10))の如く祭り上げられるためではない。このように「孤独」の「彼方」とは、甘美な浪漫風夢想を喚起するような無限の憧憬の果てを意味せず、むしろ古典ギリシア悲劇で知者オイディプスが落ちてゆく如き、心の水底の空界を指し示していると思われる、魂は正にこの空無の「彼方」へと放下されていのである。

かく「彼方」へと放下した魂の動静を考量する上で、興味深いのがエックハルトの云う「離在(Abschiedenheit)」である。

私は多くの書物を読んでみた。異教の師たちのものも、預言者たちのものも、旧約聖書も新約聖書も読んでみた。その際私が全心を傾倒して真剣に探求し

たのは、最高最善の徳、すなわち人を最もよく最も密接に神に結びつけるような徳は何かということであった。神がその本性によってあるところのものと同じものに人が神の恩寵によって成ることが出来るためには、どのような徳がなければならぬか。人が神のうちにあった時のその原像、神が被造物を創る以前において人と神との間に如何なる区別もなかったようなその原像として、私の理性がなし得、私の理性が認識し得る限り、あらゆる書物を徹底的に探求して来たが、そこで私が見出したことは、純粹な離在 (latenti aegeschidenheit) はすべてを凌駕するということにはかならなかった。なぜならば、他の徳がすべて被造物への何らかの関心をもっているのに対して、離在は一切の被造物を脱却しているからである。<sup>(13)</sup>

(エックハルト「離在について」冒頭)

例えば神のひとり子キリストを「純粹な離在」において見るならば、敢て人の子へと受肉し受難し、正に父なる神から離れて在る点が注目される。

『新約聖書』に収められた「マタイ福音書」第二十七章の第四六節以下にはこうある。

福音史家 「……して第九時(昼三時頃)にイエスは声高く叫び言った。」  
イエス 「エーリー・エーリー・ラーマー・アザブターニー?」  
福音史家 「これはつまり、『わが神、わが神、なぜ汝は私を離れて在るのか?』と云うことである。……」

合唱 「待て、エリアが来臨し、イエスを救うかどうか見てみよう。」  
福音史家 「だがイエスは再び大声で叫び、そして事切れた。」

(バッハ「マタイ受難曲」第七二)

此所と『詩篇』第二十二歌に見られる「アザブ(離在)は、別に「捨」とか「見捨」とも訳される動詞で、例えばルター訳ドイツ語(vertlassen)はこの両義を兼ね備えている。ならば何故に「見捨」とか「離脱」(註(13))

とせずに「離在」とするかと云うと、この言い方が秘蔵に「隠れた神(エール・ミスタテール)<sup>(18)</sup>」の莊嚴を語るに、他の場合よりも適しており、他方「捨」とか「脱」の方は主意に根ざす故に「隠れた神(Deus absconditus)」の静謐に相応しくないと考えられるからである。

実に「隠れた神(ein verborgen Gott)」こそ、当該の思想詩「パンとぶどう酒」の焦眉の急キリスト像の姿でもあり、これは第八節で「静かな靈威(ein stiller Genius)」として「現われ(erschienen)」<sup>(21)</sup>「かつ消えた(und schwand)」と歌われ、正に有無の明暗が濃淡細やかに織り成された「隠れ働く静かな神(ein stiller Gott: ... / Verborgen-wirkend)」<sup>(23)</sup>となる。成程この「隠れ働く神」は實在(Substanz)ならぬ月影(Mondschein)の如き仮象(シャイン)として「離在(Abgeschidenheit)」に住まう。だが決して人間を「離脱」ないし「解脱」しておらぬし、ましてや世を「捨」てたり、人を「見捨」てたりしているわけではなく、然り気なく何時とは無しに「隠れ働く」と考えられるのである。

話題の「孤独」(第八句)が繋がるのは、この「隠れた神」の「離在」と解される。そして十字架上のキリスト(註(14))に倣い「何処にも安らわぬ」(註(5))と思われる「孤独な者(ein einsamer Mann)」(註(2))が目指すのは、眼前の「安らぎ」(… ruhet … ruhen … ruht …) (第一句、第三句、第六句)ではなく、むしろ「神自身(ipse)」たる「安らぎ(quiet)」に他ならず、これをこそ正に「堅忍不拔の心で待ち望む」(註(7))のである。

私達は汝の神聖な偉容に安らわん(requiescas)と待ち望む。汝は…常に安らぎて(quietus)ある。なぜなら(神よ)汝の安らぎは汝自身なのだから(tua quies tu ipse es)。<sup>(22)</sup>

(アウグスティヌス「告白」終結部)

「眼前に無い」(註(7))「安らぎ(ルーエ)」つまり「神自身」へと至

る道は、目下「離在」に懸かる「孤独」に存すると言えよう。

(2) 噴泉

九 ..... und die Brunnen

一〇 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet

九 ..... して噴泉が

一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り、芳香に匂う花壇を濡している。

(「パンとぶどう酒」第一節、第九句―第一〇句)

今まで扱った第九句「若き日を偲びつつ」(二五)(1)(2)まで、詩想は「安らぎ(ルーエ)」に向かつていた。思想詩冒頭の都市像に見られる眼前の「安らぎ(... ruhet ... ruhen ... ruht ...)」(第一句、第三句、第六句)は、ひき続く第七句から詩想が主情の色合いを帯び一層と内面化するに至り、単に目下の生前の「安らぎ」のみならず、更に死後永生の魂の「安らぎ」に他ならぬ「神自身」(二五)(1)(25)をも何時とはなしに目指していた。これが「恋(エロース)」(第八句)とか「孤独」(第八句)へと心が深沈する淵源である。

眼前であれ永世であれ「安らぎ」を目指す詩想は、蓋し第九句の繫辞「して(ウント)」を機に転調し、前述の「離在(Abschiedenheit)」(1)(13)の彼方を踏まえて、その遠く深い空無の色調と鮮明に明暗を織り成して、「噴泉が滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り」(第九句―第一〇句)つつ生成してくる。但しこの生成は映像を以て視覚に立ち現われる形成ではなく、空無なす「離在」の彼方へと静聴する内耳に響き生育して来る意識の流れである。

二二 「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」その三(高橋)

「噴泉(die Brunnen)」(第九句)は、空無へと放下した心魂を大地として、この奥底から「滔々と湧き(Immerquillend)」(第一〇句)でてくる。恐らく砂漠の民にとり、「生ける水の噴泉(Brun lebendiges wassers)」(「創世記」第二十六章、第一九節)は、この様なものを意味したのである。そしてこの「生ける水(マイム・ハイム)」が、正に「生ける神(エロヒーム・ハイム)」に繋がり、例えば預言者エレミヤにとり唯一神イエホヴァこそ、この「生ける水(マイム・ハイム)の源泉(ムコール)」に他ならなかったのである。

当該の思想詩「パンとぶどう酒」において、魂に「生ける源泉(die lebendigen Quelle)」は確かに「近い」と同時に把握し難い神自身(Nah ist / Und schwer zu fassen der Gott)」に似る故に、

..... Mancher  
Tragt Scheue an die Quelle zu gehn.

..... 幾多の者は  
畏み、源泉へと赴くを憚かる。

(ヘルダーリン「追想」第四節、第三八句―第三九句)

「源泉(クヴェレ)」とは「パンとぶどう酒」の場合「至福なるギリシア(Seeliges Griechenland)」を、すなわち西欧キリスト者の意識の淵源なす古典ギリシアを指す。この古典精神は西欧意識にとり、「近い」と同時に把握し難い(註(8))と言える。つまり意識の奥底深く根をおろし全く身近で、場合によっては巷の裸体女神像のように卑近とさえ看做されるのであるが、その本質(エートス)なす偉容(ダイモン)は安直な分別が「畏み憚かる」(註(9))ものである。

同様に「神自身」(註(8))たるキリストも、在り来たりの受難劇や

十字架像で喧伝されればされるほど縁遠い存在として「隠れた神」(二五)(1)(18)―(20)となる。だが古典ギリシア悲劇の誕生する「パンとぶどう酒」中央部の祝祭空間を言わば浄罪界として、始めて詩想は「隠れ働く静かな神」(二五)(1)(23)となるキリスト像を目指す。当該の「滔々と湧く噴泉 (die Brunnen / Immequillend)」(註(一))の「源泉 (Quelle)」を考える場合にも、この様な心の働きは無視できないと言える。つまり目前の都市像、具体的には南西ドイツの都市シュトゥットガルトの町中のそこ此所に散見される「噴泉 (Brunnen)」をいくら探したとて、その「滔々と湧く噴泉」(第九句―第一〇句)の「源泉 (クウエレ)」が心に無ければ、十全に当面の詩想は汲み取れないのである。

しかしながら同時に、シュトゥットガルト市内に散見される現実の「噴泉」も無視できない。なぜなら第九句の「噴泉」も他の詩歌象徴、例えば「思慮深い家長」(第四句)と同じく、単なる空想や観念の産物ではなく、正に当時の生きた現実と協和し合う表現と看做されるからである。実際に今日でもシュトゥットガルト国鉄中央駅から南西方向へ、シラー広場から市庁舎前広場 (マルクト) を経て、ヘーゲルの生家 (エーバーハルト通り五三番地) あたり迄、千メートルにも及ばない旧市街中心部を散策するだけでも、十ヶ所を下らない「噴泉」を見つけることが出来る。恐らく水道のなかった当時一八〇〇年頃には、これ以上の数の「噴泉」が滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り、芳香に匂う花壇を霑し(第九句―第一〇句)ていたと想像されるのである。

「万物の根源は水である」(タレース)とか、「この上なく貴きは水なれど」(Apoteur yeu bösp, ...) (パンタロス)と古来言われている様に、天地自然の生物にとり「水」は貴重であるのみならず不可欠なのであるから、当該の「噴泉」(第九句)の意味は大きい。しかもこの「噴泉」でいて、「パンとぶどう酒」冒頭は始めて、自然の生成の息吹きに触れることになるのであるから、それは尚更のことと考えられ

る。つまり今まで「都市」の「街路」(第一句)とか、「松明」や「馬車」(第二句)、更に「人々」(第三句)や「家長」(第四句)とか或は「広場の市場」(第六句)や「庭園」(第七句)など、様々な形象が思想詩冒頭の都市像を彩って来ているのであるが、それらは皆あくまで各々人間の生活空間に限定された表象に留まり、当該の「噴泉」(第九句)の如く天地自然の奥底とは繋がっていないからである。

蓋し当の「噴泉」は大地の奥底のみならず、前述の如く空無の「離在」(二五)(1)(13)へと放下した心の奥底からも「滔々と湧き」(第一〇句)でて来る「生ける源泉」(註(七))でもある。

Nacht ist es: nun reden lauter alle springenden Brunnen. Und auch meine Seele ist ein springender Brunnen. ....  
Ein Ungestilles, Unstillbares ist in mir; das will laut werden. ....

夜だ。今や語る弥々声高に、進る噴泉が皆。して又わが魂も、進る噴泉なのだ。.....  
ある密かならざるもの、潜まらぬものが私の中にあり、それが声高ならんとする。.....  
(二―チエ「ツアラトゥストラはこう語った」第二部、第九章「夜の歌」)

「パンとぶどう酒」冒頭で文字通り「ひそやかに (stills)」(第一句)と歌われているように、この冒頭の都市像の基調は「安らぎ」(ruhig) : : ruhen : : ruht ...) (第一句、第三句、第六句)を目指していた。これとは逆方向に「密かならざるもの (Ungestilles)」、潜まらぬもの (Unstillbares)」(註(21))として「噴泉」が滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り(第九句―第一〇句)つつ生成して来るのである。

ところで、この「噴泉」(第九句末尾)へと至る詩想展開を詳しく見ると、「若き日」や「彼方の友」への追想に繋がりがながら、「して噴泉が」と第九句は流れている。



七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは  
八 そこで恋人が奏で、或は孤独な者が  
九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が  
一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り、芳香に匂う花壇を踏している。  
(「パンとぶどう酒」第一節、第七句—第一〇句)

第一〇句末尾に云う「花壇 (Beet)」は、諸処の「庭園 (Garten)」(第七句)に附属していると考えられる。そして「彼方の友を想いつつ、また若き日を偲び」(第九句)ながら、「安らぎ」に包まれて時空を遙か遠くまで、「滔々と湧き」(第一〇句)いずる想念が、あたかも「噴泉」(第九句)の如く「清冽な水しぶきをあげ進り」(第一〇句)でて来るのである。

「何と我々は、かくも至福 (so selig) であつたことか、(一七九〇年頃のテュービンゲン神学院でのアカデーメリア風の交友よ、……)」と詩人の三歳年長マーゲナウ(一七六七年—一八四六年)が物語る「庭園 (Garten) の傍を流れていた所謂「哲学者の噴泉 (Philosophen Brunnen)」が此所で思い併される。この「庭園」(第七句)と「噴泉」(第九句)のみならず、同時に「若き日」の「彼方の友」(第九句)にも結びつく、マーゲナウの回想に耳を傾けてみよう。

今やシラーの歌「歡喜に寄す (An die Freude)」が歌い出されんとしていた。だがヘルダーリンは望んだ。僕たちがまず(詩神ムーサ達とポイボス神アポロンに縁ある)カスタリアー源泉 (katalische Quelle) で、自分たちの罪悪を皆ぬぐい浄めるべきことを。庭園の傍を流れていた所謂「哲学者の噴泉」、これがヘルダーリンの云う「カスタリアー源泉 (katalischer Quell)」だった。僕たちは庭園を通り、源泉へと赴き、顔と手を洗った。莊重にノイファーは悠然と歩を進めた。ヘルダーリンが言うには、「このシラーの歌を不浄な者は誰一人歌ってはならぬ」とのことであつた。

(マーゲナウ「交友回想録」)

興味深いのは此所で「源泉なす噴泉」が、何より「浄め (reinigen)」と結びついている点である。「清冽な水しぶきをあげ進り」(第一〇句)とある「パンとぶどう酒」の一節が注目し値する。目立たぬが力強いこの箇所は、恐らく同節の第二句と対比する時、一層と内実の意味が響きと形象とともに浮き彫りにされるであろうと思われ。

- 一 Und, mit Faken geschmckt, rauschen die Wagen hinweg
- 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

九 ..... und die Brunnen

一〇 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.  
九 ..... して噴泉が  
(「パンとぶどう酒」第一節、第二句と、第九句—第一〇句)

第二句も第一〇句も同じ本動詞 (rauschen) が使われているのであるが、前者は文字通り「過ぎ去る (hinweg)」(第二句末尾)と云える「消滅 (Vergehen)」を示し、後者は「滔々と湧き (Immerquillend)」(第一〇句)いずる「生成 (Werden)」を物語っている。この明暗をヘルダーリン自身の言葉で語ると、「生成と消滅、つまり滅びの中で生まれるもの (Das Werden im Vergehen)」と表現できる。

此所での「滅びと生成」の明暗は、只今述べた「過ぎ去る」と「滔々と湧き」の対比のみならず、「松明に (mit Faken)」と「芳香に匂う花壇を (an duftendem Beet)」との「飾られて (geschmckt)」と「清冽な (frisch)」との対比により鮮明に彩られて、各々の主語なす「馬車 (die Wagen)」と「噴泉 (die Brunnen)」とに象徴される両界の「調和ある対立 (das Harmonischentgegengesetzte)」を織り成している。

の「対立」は成程どぎつく無いのではあるが、但し鋭い対立と考えられる。殊に前述の「浄め」(註(25))を考えに入れるならば、それは一層と深く扱られるように思われるのである。

別論で述べたように、「松明に飾られた馬車が疾駆し過ぎ去る」(第二句)のは、領邦ヴェルテムベルクの首都シトゥットガルトに建てられた宮殿の傍にある宮廷オペラ劇場、すなわち門閥たる特権階級専用の歓楽の館と考えられる。この華麗な言わば「松明に飾られた社交の夜会を目指し」馬車が疾駆し過ぎ去る(hinwegrauschen)。(第二句)のを「驕然」(註(26))としたものと耳にする詩人の内観には、市井の諸所に「滔々と湧く噴泉」が「清冽な水しぶきをあげ進り(irrisch rauschen)」(第一〇句)でて「生成」してくる。

この様な人工と自然の対立を鋭く扱るのが、「新約聖書」の「マタイ福音書」で語られるイエス・キリストの言葉である。

野の百合を見たまえ。…… 栄華に咲き匂うソロモンでさえ、正にこの百合一輪ほどにも着飾ってはいなかったのだ。<sup>30)</sup>

(マタイ福音書、第六章、第二八節以下)

「浄め」(註(25))る神言(ロコス)に扱れば、絢爛豪華なソロモン宮廷ユダヤ文化として泡の如き虚飾に過ぎず、「百合一輪」に見られる「真正な自然の畏怖にみちた厳肅さ」(der furchbare Ernst der wahren Natur)「(ニーチエ)と比べれば、単なる人工の産物に過ぎないと看做される。この様な脈絡から一層と鋭く、「滔々と湧く噴泉」(第九句―第一〇句)と「松明に飾られた馬車」(第二句)との織り成す「生成と消滅」(註(27))の明暗が形造られるのである。

とりわけ副詞句の対比、「松明に(mit Fackeln)」(第二句)と「芳香に匂う花壇を(an duftendem Beet)」(第一〇句)との人工と自然との対比から読み取れるものこそ、先の「浄め」(註(25))る神言(註(30))

が明示している宮廷の「栄華」と自然の精華たる「百合一輪」の花との二律背反に他ならない。そして花咲き「芳香に匂う花壇」と「滔々と湧く噴泉」との諧調が、「祝祭の日」には新教徒ヘルダーリンの属した「教区民の(神を)畏み怖れる歌声」の「響き(rauschen)」に見事協和した模様である。

- 一六 Am Feiertag und die Blumen in der Stille.
- 一七 Wohl blühten schöner auch sie und helle quillten lebendige Brunnen.
- 一八 Fern rauschte der Gemeinde schauerlicher Gesang.
- 一九 Wo heiligem Wein gleich, die geheimen Sprache

一六 祝祭の日には、また(庭園の花壇の)花もひそやかに、  
一七 恐らく常より麗しく咲き匂いし、また明るく湧き進りし生ける噴泉。  
一八 彼方に響きしは、教区民の(神を)畏み怖れる歌声、  
一九 そこでは聖なる葡萄酒に似て、黙示の言葉が  
(ヘルダーリン)宥和する者よ……」初稿、第二節、第一六句―第一九句)

自然に「咲き匂う花」と「生ける噴泉」は、かくして「パンとぶどう酒」第一節の場合、言わば「松明に飾られた宮廷オペラ文化の華麗な社交趣味(precostie)と鋭い明暗を織り成しつつ、「祝祭の日には、……(神を)畏み怖れる歌声(schauerlicher Gesang)」へと何時とはなしに繋がりがゆくののである。

思想詩第一節は第六句に「(黄昏に)憩う(昼間は)忙しき広場の市場(der geschäftige Markt)」とある故に目下は過日と考えられ、詩人たちが新教徒は教会へ赴かないと思われる。従って「(神を)畏み怖れる歌声」(註(32))は、「悠然と和やかにわが家にくつろぐ(Wohlfrieden zu Haus)」と歌われる市民意識を空無の彼方へと突き抜けた古典祝祭空間「至福なるギリシア」(註(10))に見い出されることとなる。蓋し古典ギリシア「悲劇の誕生」(註(13))に特有の「真正な自然の畏怖にみちた厳肅さ」(註(31))は、此所で「音楽の精神(ガイスト)から(Aus

dem Geiste der Musik」<sup>(28)</sup> 就く「ドイツ音楽、殊にそのバッハからベートーヴェンへ、ベートーヴェンからヴァーグナーへの偉大な日輪の歩み」<sup>(29)</sup> から汲み取られるのが相応しかろう。

- 一一五 Denn, wie wenn hoch von der herrlichgestimmten, der Orgel
- 一一六 Im heiligen Saal.
- 一一七 Reinquillend aus den unerschöpflichen Röhren.
- 一一八 Das Vorspiel, waked. ....

- 一一五 即ち恰も高きより、かの壮麗に調律された、教会の風琴より
- 一一六 あの聖なる(祈りの)会堂では、
- 一一七 清冽なる(響きの)噴泉が滔々と、尽きせぬ(音の)管また管から、
- 一一八 序曲なして、目覚めよと呼ぶ声が、

(ヘルダーリン「ドーナウの源泉で」残存草稿冒頭)

もしこの様に心身を「浄め」(註(25)る「生ける源泉」(註(7)を、  
当の讃歌草稿成立の地盤となる十八世紀啓蒙期の市民意識に求めるとし  
たなら、何を措いてもセバステアン・バッハ(一六八五年―一七五〇  
年)のオルガン作品を筆頭に挙げることが出来るであろう。

ヘルダーリンの詩歌の響きは、この新教徒バッハの音楽作品に見られ  
るような威厳ある慎しみ深い市民意識から進り出て来る。「パンとぶど  
う酒」第一節では、当該の「滔々と湧く噴泉 (die Brunnen / Immer-  
quillend)」の件りが正にこれにあてはまる瞠目すべき詩節である。目  
立たないが力強い。他方十八世紀宮廷オペラ文化は、言わば「松明に飾  
られ」た如く絢爛豪華に目立つと同時に底力が無い。殊にドイツ諸領  
邦の宮廷文化は、外来のフランス趣味に彩られた異国情緒につつまれた  
ものであり、大地ゲルマニアの自然な風土に根ざすものではない。こ  
れに反してバッハの「マタイ受難曲」(一七二九年)とかヘルダーリン  
の「パンとぶどう酒」(一八〇〇年―一〇一年)の場合は、事態が百八十  
度コペルニクスの転回を成し遂げ、「古代ギリシア人以来、再び祖国と

二五 「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」その三(高橋)

自然に適い、本来の始源より独創的に歌い始める」<sup>(30)</sup> のである。

「本来の始源(オリゴ)より独創的(eigenlich original)」  
とは自然にと云うことであるが、実は表現する上でこれは難中の難であ  
る。例えばヘルダーリンが愛読した「アルディングゲロ」(一七八七年)  
の著者ハインゼ(一七四六年―一八〇三年)は、その第二巻・第四部で  
「噴泉」を「自然の中における永遠の生命を宿す聖なる象徴」と記す。

Alles ist still, nur plätschern angenehm die Springbrunnen: heilige Symbole  
des ewigen Lebens in der Natur.

何もかも静かである。ただ水音が甘美に噴泉から聞こえる、自然の中におけ  
る永遠の生命を宿す聖なる象徴より。

仮に註解や評釈の如き学術表現のような場合なら、このような説明も不  
自然ではない。ところが詩人や芸術家は口先で巧妙に附言するよりは、  
むしろ自然にそれと解かるように表現すべく求められている。にも拘わ  
らずハインゼの例では、表現のかわりに附言で終ってしまっているの  
である。

他方ヘルダーリンの「パンとぶどう酒」第九句における「噴泉」はと  
言うと、説明や附言は一切ない。ところが第九句以下の「噴泉」の詩歌  
表現そのものが、正に「自然の中における永遠の生命を宿す聖なる象徴」  
として現われていると読める。蓋しこれを敢て芸術作品と言うには、そ  
の詩歌象徴は余りに自然で業とらしくない。此所で「自然」とは三重の  
意味でそう言える。第一には通例の芸術造形と同様に在りのままの事物  
を映す点であり、第二には詩人自身の生い育った「祖国と自然に適い」  
(註(39))、風土と歴史の在りのままの姿を現わしているということ  
であり、第三には以上の両者が共に奥深い内なる自然たる人間本性に開か  
れている点である。

殊にこの第三の点である心の内奥への拡がり、これは無限の空無の彼

方への拡がりとして同時に心意識のみならず時空の果てまでも目指すものであるが、この空無を孕んだ自然生命の廣大無辺において、当該の「噴泉」(第九句)は稀有の詩歌象徴たり得ると考えられる。

九 …… und die Brunnen

一〇 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet

九 …… して噴泉が

一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ進り、芳香に匂う花壇を濡している。

成程これは前述の如く、敢て芸術作品として取り立てて人目をひく表現ではない。しかしながら静かに心して「パンとぶどう酒」第一節を読み進んでみるならば、恐らく読者は第九句から第一〇句にかけて「滔々と湧き進り濡している噴泉(Brunnen / Immerquillend ……)」が内耳に響き渡るのを認めるであろう。このように私には、これもまた瞳目すべき一片の「泉の詩」と思われるのであるが、しかし残念なことに万足卓著「泉の詩」(一九八〇年)には、この詩節への言及を見い出すことが出来ない。

もっとも「泉の詩」には様々な噴泉の歌が採られており、既に本論で言及したツアラトゥストラの「夜の歌」(註(21))も収められている。だが著者が芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水のを」との「一首がわが詩歌史上に持つ意義にも似ている」(註(45))とまで絶賛しているのは、「マイヤー(一八二五年―一九八〇年)の秀作『ローマの噴泉(Der römische Brunnen)』(二八八二年)に他ならない。

Aufsteigt der Strahl und fallend giebt

Er voll der Marmorschale Rund.

Die sich verschleiernd, überfliebt

In einer zweiten Schale Grund.

五 Die zweite giebt, sie wird zu reich,  
Der dritten wallend ihre Flut,  
Und jede nimmt und giebt zugleich  
Und strömt und ruht.

立ち登るより水柱はくずれ落つ  
大理石なる皿の円きに、  
溢れては、かつぐごとくに、またそそぐ

五 …… 第二の皿の深き底に、  
みなぎりて第二の皿は第三の  
皿にわきつつ与える波、

受けながらいずれの皿もまた与え  
かつほとばしりかつやすみ。

実に見事な芸術作品である。だがそれ以上でも以下でもない。この脈絡を「パンとぶどう酒」の「噴泉」を鑑みて考えてみよう。

ところで芭蕉は「古池や ……」と、実に自然に歌っている。支那の山水画でもなく、天然の蓮池や西域の青海でもない、この「古池や ……」は私達の「祖国と自然に適い、本来の始源より独創的に歌い始め」(註(39))られているように思われる。他方ドイツ語圏に住む者にとり、「ローマの噴泉」(註(46))は異国情緒に包まれている。単に歌われた対象のみではなく、実にマイヤーの歌いぶり、造形彫琢に秀でた南方の芸術の息吹きを伝える。すなわち全て明瞭に縁どられ、くつきりと形造られ「丸く収まった芸術作品(ein abgerundetes Kunstwerk)」(註(47))に、「音楽の精神(ガイスト)から」(註(36))の「魂の歌声(Seelengesang)」(註(48))が沸き上がるであろうか。

成程「ローマの噴泉」は造形見事に、歌い始めから文字通り「立ち登る(Aufsteigt)」(註(45))のであるが、しかし大理石の彫像にも似た堅さと冷たさが拭い去れない。つまり燦燦と日輪の輝く碧空の下にあるギリシアやイタリアの「祖国と自然」には、生き生きと古代オリュムピ

アの神々の如く映える研磨の成果が、北方ドイツ語圏の言葉の響きには乗らず何処となく不自然な観を逸れ難いと言える。他方ヘルダーリンの「噴泉」の詩節や芭蕉の「古池や……」の句には、この不自然さが見受けられず、むしろ各々の歴史風土に適う「魂の歌声」が静かに奏でられるのである。

しかも「魂の歌声」は此所で、各々の精神風土に直結している。芭蕉の俳味は「わび、さび」に通じ、ヘルダーリン詩歌の響きは「音楽の精神」を抜きに考え難い。そして前者は仏法の空無の真諦へと、後者は西欧キリスト者の祈りの歌声へと繋がりゆく。もはや両者ともに「丸く収まった芸術作品」へと円現するに甘んぜず、敢て豊かな意識内面へも十全に拡がりゆく「魂の歌声」となるのである。

## 註 解

### 〔五〕 黄昏から聖夜へ

#### (1) 離 在

① ヘルダーリン全集、シュトゥットガルト版、一九四六年―七七年（索引一九八五年）、第二巻、九〇頁。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、

して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求めて歩み

ゆく人々。

して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。（黄昏の今は、葡萄も花束もなく、

して手仕事の品々もなく安らう、（昼間は）忙しき広場の市場。

（パンとぶどう酒 第一節、第一句―第六句）

※筆者の別論、「パンとぶどう酒」冒頭の都市像（五）(2) (29) の「結論」（六〇頁―六四頁）でも述べたことであるが、「パンとぶどう酒」に関する今世紀の代表的な研究書、ジューミット著、ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」（一九六八年）では、冒頭の都市像（第一句―第六句）に見られる「忙しい生活の価値領域」が、詩想の核心なす「至福なるギリシア」（第五五句）の如き「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられ」（三五頁）たものと解釈されている点、筆者の説解と真正面から対立している。つまり両者の確執ばかりを見て、相互の内的関連を見捨とした点で、右記論文を筆者は批判したのである。従って当面の第七句以下で、「より深層の生が響きわたる。（in Aufklingen des tiefen Lebens）」（四一頁）と右記論文が述べる場合と、筆者が「詩情が内観に沈みゆく」と論述する場合とは事情が異なる。すなわち筆者は、冒頭の都市像に見られる日常の市民生活に離反して詩想の核心へと論展開しているのではなく、むしろその日常性の只中において「内観に沈みゆく」とともに、この魂の動静が「至福なるギリシア」（註（12））の開かれた悲劇祝祭の時空を目指す旨を主張しているのである。これに反して右記論文の力説する所は、日常性から乖離した精

神の想像力による飛翔であり、これによると第六句と第七句との間に大きな亀裂が生じ、冒頭六句のみが宙に浮いてしまう結果となる。

- (2) 全集、第二巻、九〇頁。
  - (3) 全集、第二巻、一八九頁。
  - (4) 全集、第二巻、九五頁。
  - (5) 全集、第一巻、二六五頁。第三巻、一四三頁。
  - (6) ダンテ作品集、ダンテ協会編、一九六〇年、四五二頁。
  - (7) 原典希臘対訳「新約聖書」(ヴェルテムベルク聖書協会の刊一九三〇年)「ロルター訳一五四五年」聖書(註(14))後篇、三三九頁右段。
  - (8) 全集、第六巻、三〇五頁。一七九九年一月一日付弟宛ヘルダーリン書簡一七一。
  - (9) 全集、第一巻、二九八頁。
  - (10) 全集、第二巻、九六頁。和訳全集、河出書房新社、一九六六年―一九九年、第二巻、一九九頁、手塚富雄訳。
  - (11) 右記和訳全集、第二巻、一一九頁。
  - (12) 詳しくは筆者の別論、ヘルダーリンの西歐ギリシア論——「至福なるギリシア」(高知大学学術研究報告、第三三巻―第三五巻、人文科学篇所収、一九八五年―八六年刊)。殊にその(三)「神話の神」(1)内面の飛翔(第三四巻、二二頁―二四頁)を参照のこと。
  - (13) ドイツ語作品集、第五巻、一九六三年、四〇〇頁―四〇一頁。講談社・人類の知的遺産、第二巻、マイスター・エックハルト、一九八三年、二六九頁―二七〇頁、上田閑照訳。但し上田訳では「離在」を「離脱」と訳してあるが私は叙述上この訳語を取らず、敢て相原信作訳・エックハルト著「神の慰めの書」(講談社学術文庫、一九八五年)所収の訳語「離在」(一八六頁)を採用した。蓋し相原訳(本来一九四九年筑摩書房刊)は旧来のプファイファー版(一八五七年)に多く依拠しているため、訳語「離在」に関して以外は全て、近年の学術成果を踏まえた「ドイツ語作品集」を底本とした上田訳を引用してある。
- ※当該の「離在 (Abschiedenheit)」を近代ドイツ詩歌の解釈の際に意味深長に用いた例として、筆者が知るものは、ハイデガー著「言葉への途上」(一九五九年)に収められたトラークル論「詩の中の言葉」(一九五三年)である。「この詩人トラークルの諸々の詩作は(世を)離れて在る者 (der Abgeschiedene) の歌へと収斂している故に、私達は彼の詩歌の所在を離在 (die

Abschiedenheit) と名付けます。」(「言葉への途上」第五版、一九七五年、五二頁)

※※此所でハイデガーの念頭にあるものは、トラークルの「夢の中のセバスティアン」(一九一四年)に収められた著名な詩歌「離在者の歌 (Gesang des Abschiedenen)」と考えられる。確かに「パンとぶどう酒」の詩想に、この「離在」は響き合う。だが当面の第八句の「孤独」よりはむしろ第三部「西歐の夜」に言う「乏しき時代の詩人」(第七節、第二三二句)に、この「離在」は深い関連を有すると思われるので、目下は関連を指摘するのみに留め、より立ち入った論述は今後の課題としたい。

(14) ゲットティンゲン・バッハ研究所/ライプツィヒ・バッハ資料館共編「新バッハ全集」第二巻、第五巻(一九七三年)所収原典版に依る「マタイ受難曲」、音楽の友社、一九七六年、B W V 第七一、叙唱、二五二頁―二五四頁。

前掲(註(7))原典新約聖書、八〇頁を参照。  
 一五四五年版ルター訳「聖書」原典複製写真版、シュトゥットガルト、ドイツ聖書協会、一九六七年、後篇、二六三頁右段を参照。  
 シュトゥットガルト版原典ヘブライ語「旧約聖書」(ドイツ聖書協会刊、一九六七年―七七年、一九八四年)「詩篇」第二二歌、第二句、一一〇四頁を参照。  
 クロプシュトック「救世主」(一七四八年―一七八〇年/一七九九年)第一〇歌(一七五五年/一七八〇年/一七九九年)、第一〇三〇句(一七八〇年アルトナ版)第一〇四五句(一七九九年ライプツィヒ版)。ハンザー版作品集(一九六二年)所収「救世主」全二〇歌(一七八〇年アルトナ版に依る)四四三頁。ヘルダーリン(一七七〇年生)は既にアルトナ版以前の段階で「救世主」に親しんでいたと考えられる。

- (15) 日本聖書協会刊和訳「聖書」、「旧約聖書」一九五五年改訳、七六四頁。「詩篇」。
- (16) 右記(註(15))和訳「聖書」、「新約聖書」一九五四年改訳、四八頁。「マタイ福音書」。
- (17) 右記(註(14))一五四五年版「聖書」の前篇二九四頁右段(詩篇)と後篇二六三頁右段(マタイ福音書)。
- (18) 右記(註(14))原典旧約聖書、七四六頁。イザヤ書、第四章、第一五節。
- (19) 公認ウルガータ聖書、シュトゥットガルト、ドイツ聖書協会、一九六九

年、一九八三年、第二巻、一一四四頁。「イザヤ書」。

(20) 右記(註(14))一五四五年版「聖書」後篇、二二五頁右段。「イザヤ書」。

(21) 全集、第二巻、九四頁。第二二九句。

(22) 全集、第二巻、九四頁。第二三〇句。

(23) ヘルダーリン「婚礼前のエミーリア」第二九句―第三〇句。全集、第一巻、二七八頁。

(24) 詳細は右記(註(12))ヘルダーリンの西欧ギリシア論、殊にその(三)神話の神(10)最深の親密性(第三五巻、二頁―四頁)参照。

(25) トイブナー「古典叢書」告白、一九三四年初版、シュトゥットガルト、再版一九六九年、三七二頁。「告白」第三巻、第三八章。

羅独対訳「告白」一九五五年、ベルンハルト訳、八四二頁/八四三頁。

(2) 噴泉

(1) 全集、第二巻、九〇頁。

※この「パンとぶどう酒」第九句から第一〇句にかけて、シュミット著「ヘルダーリンのエレギー」…(五)(1)(1)では、「und die Brunnen」の「u(n)」ならびに「Immerquillend und frisch」の「i(i)」の音価に注目(四二頁)じたり、「噴泉」と「晚鐘」(第十一句)を「浪漫詩歌の二大主題、彼方と逝く時の流れ」(三五頁)に関連づけ説明を試みたりしている。

(2) 一五四五年版「聖書」(五)(1)(14)前篇、一五五頁右段。「創世記」第二六章、第一九節。

※同「聖書」後篇、二九九頁左段。「ヨハネ福音書」第四章、第一四節。「永遠の生命へと涉り入る(靈)水の源泉(ein Brun des wassers) … Adas in das ewige Leben quille)」。同「聖書」前篇、三四九頁左段。「雅歌」第四章、第一五節、「生ける水の源泉(ein Born lebendiger wasser)」。

(3) 原典旧約聖書(五)(1)(14)四〇頁。「創世記」第二六章、第一九節。

(4) 右記(註(3))原典旧約聖書、二九六頁。「申命記」第五章、第二六節。

(5) 右記(註(3))原典旧約聖書、三頁。「創世記」第二章、第五節。

(6) 右記(註(3))原典旧約聖書、七八二頁。「エレミヤ書」第二章、第一三節。別には「イザヤ書」第五五章も参照。

(7) 右記(註(2))一五四五年版「聖書」後篇三二六頁右段。「エレミヤ書」第二章、第三三章。

※ランゲン、「ドイツ敬虔主義の語彙」(初版一九五四年)改訂再版(一九六八年)には、「源泉」「聖書」では、神が生ける源泉(Lebendige Quelle)とあり、この意味は敬虔主義の場合も当語の原義(Grundbedeutung)をなす。(三)

九頁)、「源なす噴泉(Quellbrunnen)」(三三〇頁)、「神は噴泉として…噴く源泉(Brunnquell)すなわち神(=Gott)」(三三二頁)とある。

(8) 全集、第二巻、一六五頁。ヘルダーリン「パトモス」初稿、第一節、第一句―第二句。

(9) 全集、第二巻、二八九頁。

(10) 全集、第二巻、九二頁。

(11) 例えはヴィーランドが後に「ギリシア物語(Griechische Erzählungen)」(一七八四年)と改題した「滑稽物語(Comische Erzählungen)」(一七六五年)における宮廷風ロココ趣味を考えると良し。

その様にキュブリア(ウエヌス)は立ち、半ば身を振らせ、さながらフイレンツェの(女神像)に似て、片手で被う、顔を紅潮させ、自らに撓垂れ、魅惑の乳房を、だが被いようもない。

二五 そして別の(手)で―皆様御存知の所を。

(「ギリシア物語」パリスの審判」第二八一句―第二八五句。マイヤー版四巻本作品集、一九〇〇年、第二巻、一八七頁)

この種の理想像を求めれば、ヘレニズム期の代表作「ミロのアプロディーテ」(ルーブル美術館蔵)にゆき着くことになる。蓋し他方、古典ギリシアの「優美と尊厳」(シラー)は別物で、そもそも「半ば身を振らせ」る如き婚恋の跡は見られないのである。

(12) 例えはゲーテは諷刺劇「神々、英雄たち、ヴィーラント」(一七七四年)で、古典ギリシア神話を「畏み憚り」り、ヴィーラントの詩歌象徴を厳しく批判している。

アルケステイイス あなた(描いた)アルケステイイスは善良で、あなたの(描いた)小娘や男の子を樂しませ、また恐らく操ったりしたことでしよう。つまりこれがあなたのおっしゃる感動なのですから。

ヴィーラント あなたは否定なさらないでしょう。私の方が全体を、より感じ易く(deklarer)取り扱った点を。

(13) ニーチェ「悲劇の誕生」(一八七二年)

(14) 観光案内書シュミット著「シュトゥットガルト」所収(表表紙裏)掲載市街図を参照。

(15) これに関しては筆者の別論、「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」そ

- の二——(四) 思慮深い家長(一九八六年度高知大学術研究報告、第三卷、人文科学篇、六七頁—一〇二頁、一九八六年十一月刊)の七〇頁を参照。
- (16) 欧文註(五)(2)(14) 掲載シユトウツトガルト市街図参照。諸所にBrと明記してある。
- (17) アリストテレイス「形而上学」九八三日。ティールス/クランツ共編「ソークラテース以前の哲学者断片(Die Fragmente der Vorsokratiker)」(第六版一九五一年以降は第十六版一九七二年まで同一)第一巻、七六頁—七七頁。
- (18) 『オリュムピア祝勝歌』第一歌冒頭。トイブナー古典叢書『ペンダロス』第一巻「祝勝歌」第五版、一九七二年、二頁。
- (19) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(1)。
- (20) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(2)。
- (21) ニーチェ批判版作品全集、第六部、第一巻、一九六八年、一三三頁。
- (22) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(1)。
- (23) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(2)と(五)(2)(1)。
- (24) ヘルダーリン全集、第七巻、第二分冊、三九七頁。マーゲナウの交友回想録。詳みにこの回想録は、一九一七年に始めて公刊された。
- (25) 全集、第七巻、第一分冊、三九六頁。
- (26) 全集、第二巻、二八二頁。
- (27) 全集、第四巻、二八二頁。
- (28) ヘルダーリン「詩歌精神の方法論」。全集、第四巻、二六〇頁。
- (29) 筆者の別論左記二点を参照。  
一、「パンとぶどう酒」冒頭の都市像(一九八三年度高知大学術研究報告、第三巻、人文科学篇、二二頁—七〇頁、一九八四年三月刊)、殊にその(三)市民(3)祝祭とオペラ文化(四九頁—五五頁)参照。  
二、内省と光明——「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」その一(一九八五年度高知大学術研究報告、第三巻、人文科学篇、一五五頁—二〇一頁、一九八六年二月刊)、殊にその(三)燈火と松明(二七〇頁—二八二頁)参照。
- (30) 前掲(五)(1)(7) 原典新約聖書、十四頁。前掲(五)(1)(7) 一五四五年版「聖書」後篇、二四八頁右段。
- (31) 「悲劇の誕生」(一九七二年)第九章、批判版作品全集、第三部、第一巻、一一二頁。
- (32) 全集、第二巻、一三〇頁。
- (33) 右記(註(29))「パンとぶどう酒」冒頭の都市像、四一頁参照。
- (34) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(1)。
- (35) 全集、第二巻、九〇頁。(五)(1)(1)。
- (36) 「悲劇の誕生、音楽の精神から」(一九七二年)。右記(註(31))全集、第三部、第一巻、一七頁。
- (37) 右記(註(36))第一巻、一三三頁。「悲劇の誕生」第九章。
- (38) 全集、第二巻、二二六頁。
- (39) 一八〇二年十二月二日付ペーレンドルフ宛ヘルダーリン書簡二四〇。全集、第六巻、四三三頁。
- (40) 「アルディングクロ」(レクラム文庫)シユトウツトガルト、一九七五年、二五三頁。
- (41) 万足卓「泉の詩」郁文堂、一九八〇年。
- (42) 右記「泉の詩」九頁。
- (43) 岩波日本古典文学大系・第四五巻「芭蕉句集」一九六二年、三七頁。
- (44) 右記(註(41))「泉の詩」一一〇頁。
- (45) マイヤー全集(全十五巻)歴史批判版、ベルリン、第一巻、一九六三年、一七〇頁より原詩は引用。
- (46) 右記(註(41))「泉の詩」一〇九頁、万足卓訳。
- (47) 「丸く収まった芸術作品」はゲーテ文学を評して、ハイネが「ロマン派」(一八三五年—三六年)で述べた言葉(世紀記念版全集、第八巻、一九七二年、三五頁)であるが、これと「パンとぶどう酒」との関連については、筆者の別論「ヘルダーリンの西欧ギリシア論」(五)(1)(12)の(二)シラーの問題提起(3)理想と人生(第三三巻、二二頁—二六頁)、および(二)古典ギリシアとキリスト教西欧(7)古典古代理念追求(第三四巻、七頁—一〇頁)を参照。
- (48) ヘルダーリン「ドイツの歌」(Deutscher Gesang)第二〇句。全集、第二巻、二〇二頁。
- (昭和六二年・一九八七年四月二三日受理)  
(昭和六二年・一九八七年九月二六日発行)



- Nun aber erwacht ist, nun, aufsteigend ihr,  
Der Sonne des Fests, antwortet  
Der Chor der Gemeinde;
- 39) Brief 240 an Böhlendorff. 2.12.1802: StA 6. 433.  
Mein Lieber! ich denke, daß wir die Dichter bis auf unsere  
Zeit nicht commentiren werden, sondern daß die Sangart über-  
haupt wird einen andern Charakter nehmen, und daß wir darum  
nicht aufkommen, weil wir, seit den Griechen, wieder anfan-  
gen, väterlandisch und natürlich, eigentlich originell zu  
singen.
- 40) Heinse „Ardinghello“ (2 Bände. 1787) Stuttgart. Reclam-Uni-  
versal-Bibliothek. Kritische Studienausgabe. 1975. S.253.  
Nacht ist doch die schönste Beruhigung von Geschäften, wo  
die Phantasie die freiesten Flüge tut und der Mensch am  
mehrsten seiner selbst genießt. So raste ich jetzt hier oben  
auf der Villa Medicis in meinem Zimmer. Rom schläft; der  
blaue unermeßliche Äther schwebt darüber wie eine Henne über  
ihren Küchlein, und blinkend hell Gestirn erleuchtet selig  
die Gegenden. Alles ist still; nur plätschern angenehm die  
Springbrunnen: heilige Symbole des ewigen Lebens in der Na-  
tur.
- 41) Bansoku, Taku: Izumi-no-Shi. Ikubundo. 1980.  
42) Izumi-no-Shi (V(2)41). S.9.  
43) Basho: Ku-Syu. Iwanami-Nihon-Koten-Bungaku-Taikai. 1962. S.  
37.  
Huru-Ike-ya Kawazu tobikomū Mizu-no-Oto.  
44) Izumi-no-Shi (V(2)41). S.110.  
45) Meyer, C.F. „Der römische Brunnen“ (1882): Sämtliche Werke.  
15 Bände. Historisch-Kritische Ausgabe. Berlin. Benteli. Bd.1.  
1963. S.170.  
Aufsteigt der Strahl und fallend gießt  
Er voll der Marmorschale Rund,  
Die, sich verschleiernd, überfließt  
In einer zweiten Schale Grund;  
Die zweite gibt, sie wird zu reich, 5  
Der dritten wallend ihre Flut,  
Und jede nimmt und gibt zugleich  
Und strömt und ruht.
- 46) Izumi-no-Shi (V(2)41). S.109.  
47) Heine „Die romantische Schule“ I. Buch: Säkularausgabe. Ber-  
lin/Paris. Aufbau/Centre National de la Recherche Scientifique.  
Bd.8. 1972. S.35  
der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm  
die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler  
in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein ab-  
gerundetes Kunstwerk.
- Vgl. Takahashi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin (V(1)12).  
[I] Schillers Aufbruch. (3) „Das Ideal und das Leben“ (Vol.33.  
S.22-26) / [II] Das klassische Griechentum und das abendländi-  
sche Christentum. (7) Die Antike als Idee (Vol.34. S.7-20).  
48) „Deutscher Gesang“ V.15-20: StA 2. 202.  
dann sitzt im tiefen Schatten, 15  
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,  
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter  
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers  
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,  
Den Seelengesang. 20

Takahashi, Katsumi: Verinnerlichung und Erleuchtung — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: ‚Heilige Nacht‘. Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201. Februar 1986). [III] Erleuchtung und Beleuchtung (S.170-182).

30) Novum Testamentum graece et latine (V(1)7). S.14.

καταμάθετε τὰ κρίνα τοῦ ἀγροῦ πῶς αὐξάνουσιν· οὐ κοκκῶσιν οὐδὲ νήθουσιν· λέγω δὲ ὑμῖν ὅτι οὐδὲ Σολομῶν ἐν πάσῃ τῇ δόξῃ αὐτοῦ περιεβάλετο ὡς ἐν τούτων.

Considerate lilia agri quomodo crescunt: non laborant, neque ent. Dico autem vobis, quoniam nec Salomon in omni gloria sua coopertus est sicut unum ex istis.

Vgl. Biblia Germanica 1545 (V(1)7). „Euangelium Mattheus“ VI. 28-29. S.CCXLVIII.

Schawet die Lilien auff dem felde / wie sie wachsen / Sie erbeiten nicht / auch spinnen sie nicht: Ich sage euch / Das auch Salomon in aller seiner Herrlichkeit nicht bekleidet gewesen ist / als der selbigen eins.

31) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.19: Kritische Gesamtausgabe (V(2)13). III.Abteilung. Bd.1. S.121.

die bequeme Lust an einer idyllischen Wirklichkeit, ... an dem furchtbaren Ernst der wahren Natur zu messen ... Wer die Oper vernichten will, muss den Kampf gegen jene alexandrinische Heiterkeit aufnehmen, ...

32) „Versöhnender der du nimmergeglaubt ...“ 2.Str. V.14-21: StA 2. 130.

Einst freueten wir uns auch,  
Zur Morgenstunde wo stille die Werkstatt war 15  
Am Feiertag, und die Blumen in der Stille,  
Wohl bluheten schöner auch sie und helle quillten  
lebendige Brunnen.

Fern rauschte der Gemeinde schauerlicher Gesang,  
Wo heiligem Wein gleich, die geheimeren Sprüche  
Gealtert aber gewaltiger einst, aus Gottes 20  
Gewittern im Sommer gewachsen,

33) Takahashi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (V(2)29). S.41.

34) Vgl. V(1)1.

35) Vgl. V(1)1.

36) Vgl. V(2)13.

37) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.19: Kritische Gesamtausgabe (V(2)13). III.Abteilung. Bd.1. S.123.

die deutsche Musik, wie wir sie vornehmlich in ihrem mächtigen Sonnenlaufe von Bach zu Beethoven, von Beethoven zu Wagner zu verstehen haben. Was vermag die erkenntnislüsterne Sokratic unserer Tage günstigsten Falls mit diesem aus unerschöpflichen Tiefen emporsteigenden Dämon zu gewinnen?

38) „Am quell der Donau“ V.25-35: StA 2. 126.

Denn, wie wenn hoch von der herrlichgestimmten, der Orgel  
Im heiligen Saal,  
Reinquillend aus den unerschöpflichen Röhren,  
Das Vorspiel, wekend, des Morgens beginnt  
Und weitumher, von Halle zu Halle,  
Der erfrischende nun, der melodische Strom rinnt, 30  
Bis in den kalten Schatten das Haus  
Von Begeisterungen erfüllt,

17) Aristoteles „Metaphysica“ 983B: Die Fragmente der Vorsokratiker. Hrsg.: Diels, Hermann / Kranz, Walther. 7. Aufl.: Unveränderter Nachdruck der 6. Aufl. (1951). Berlin/Zürich. Weidmann. 1954. Bd.1. S.76-77.

ἀρχὰς εἶναι πάντων . . . . θαλῆς μὲν ὁ τῆς τοιαύτης ἀρχηγὸς φιλοσοφίας ὕδωρ εἶναι φησιν . . . . .

18) Pindaros „Olympia“ I. 1: Bibliotheca Teubneriana. Pindarus. Pars I: Epinicia. Leipzig. Teubner. 5. Aufl. 1971. S.2.

Ἄριστον μὲν ὕδωρ, . . .

(Wohl ist Wasser das Beste, . . . . .)

19) Vgl. V(1)1.

20) Vgl. V(1)2.

21) Nietzsche „Also sprach Zarathustra“ (1883-85) Zweiter Teil. 1884. Kap.9: „Das Nachtlid. Anfang: Kritische Gesamtausgabe“

(V(2)13). VI. Abteilung. Bd.1. S.132.

Nacht ist es: nun reden lauter alle springenden Brunnen.

Und auch meine Seele ist ein springender Brunnen. Nacht

ist es: nun erst erwachen alle Lieder der Liebenden. Und

auch meine Seele ist das Lied eines Liebenden. Ein Unge-

stilltes, Unstillbares ist in mir; das will laut werden.

22) Vgl. V(1)1.

23) Vgl. V(1)2.

24) „Freundeserinnerungen Rudolf Magenaus“: StA 7 (1) 397.

Wie waren wir so seelig! O akademische Frdschaft, . . .

25) „Freundeserinnerungen Magenaus“: StA 7 (1) 396-397.

Eines solcher Gesellschäftchen verlegten wir an dem heiter-

sten Tage in den Garten des Lamm Wirthes. Ein niedliches

Gartenhäußgen nahm uns da auf; und an Rheinwein gebracht es

nicht. Wir sangen alle Lieder der Freude nach der Reihe

durch. Auf die Bole Punsch hatten wir Schillers Lied an die

Freude aufgespart. Ich gieng sie zu hohlen. Neuffer war ein-

geschlaffen, da ich zurückkam, und Hölderlin stand in einer

Ecke u. rauchte. Dampfend stand die Bole auf dem Tische. U.

nun sollte das Lied beginnen, aber H. begehrte, daß wir erst

an der kastalischen Quelle uns von allen unsern Sünden rein-

nigen sollten. Nächst dem Garten flos der sogenannte Philo-

sofen Brunnen, das war H. kastalischer Quell; wir giengen

hin durch den Garten, u. wuschen das Gesicht u. die Hände;

Feierlich trat Neuffer einher, diß Lied von Schiller, sagte

Hölderlin, darf kein Unreiner singen! Nun sangen wir; bei

der Strofe »dieses Glas dem guten Geist« traten helle klare

Thränen in H. Auge, voll Glut hob er den Becher zum Fenster

hinaus gen Himmel, und (S.396/S.397) brüllte dieses

Glas dem gut. G. ins Freie, daß das ganze Nekkar Thal wi-

derschol. Wie waren wir so seelig! O akademische Frdschaft,

wo ist der Greis, der sich an dem Rückblike auf deine Wonnen

nicht noch immer stärkt?

26) Vgl. V(1)1.

27) „Das Werden im Vergehen“: StA 4. 282.

28) „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes“: StA 4.

260.

das Harmoniscentgegengesetzte in der lebendigen Einheit . . .

29) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und

Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1983.

Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70. März 1984) [III] Bür-

ger. (3) Das Festspiel und die „Cultur der Oper“ (S.49-55).

12) Goethe „Götter, Helden und Wieland. Eine Farce“ (1774): Werke. Hamburger Ausgabe. München. Beck/dtv. 1981/1982. Bd.4. S. 203-215.

ADMET. ... Das verdiente einige ahndungsvolle Ehrfurcht. Der zwar Euer ganzes aberweises Jahrhundert von Literatoren nicht fähig ist. ....

ALCESTE. ... Eure Alceste mag gut sein und Eure Weibchen und Männchen amüsiert, auch wohl gekitzelt haben, was Ihr Rührung nennt. ....

WIELAND. Könnt Ihr mir absprechen, daß ich das Ganze delikater behandelt habe? ..... (S.207//S.212) ... „Koloß.“

HERKULES. Bin ich dir als Zwerg erschienen?

WIELAND. Als wohlgestalter Mann, mittlerer Größe tritt mein Herkules auf.

HERKULES. Mittlerer Größe! Ich!

13) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“ (1872): Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. III. Abteilung. Bd.1. 1972. S.17.

14) Schmid, Marion: Stuttgart. Großstadt zwischen Wald und Reben. Regensburg. Helmut Schmid Verlag. Städtebildband 5. Rückseite vom Titel-Blatt.



15) Takahashi, Katsumi: „Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“. Zweiter Teil: [IV] „Ein sinniges Haupt“ (Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1986. Vol.35. Geisteswissenschaften. S.67-102. Nov. 1986). S.70.

16) Vgl. Schmid: Stuttgart. Rückseite vom Titel-Blatt (V(2)14).

Vgl. „Hohelied" 4. 15: Biblia Germanica 1545. S.CCCXLIX.  
ein Born lebendiger Wasser ...

3) Biblia Hebraica Stuttgartensia (V(1)14). S.40. „Genesis" 26. 19.

Mayim Hayihm: מַיִם חַיִּים

4) Biblia Hebraica Stuttgartensia (V(1)14). S.296. „Deuteronomium" 5. 26.

Elohyhm Hayihm: אֱלֹהִים חַיִּים

5) Biblia Hebraica Stuttgartensia (V(1)14). S.3. „Genesis" 2. 5.

Jehowah: יְהוָה

6) Biblia Hebraica Stuttgartensia (V(1)14). S.782. „Jeremia" 2. 13.

Mkohr Mayim Hayihm: מְקוֹר מַיִם חַיִּים

7) Biblia Germanica 1545 (V(1)14). „Der Prophet Jeremia" II. 13. S.XXXVI.

Denn mein Volck thut eine zwifache Sunde / Mich / die lebendigen Quelle / verlassen sie / Vnd machen jnen hie vnd da ausgehawene Brunnen / die doch löchericht sind / vnd kein wasser geben.

Vgl. Langen, August: Der Wortschatz des deutschen Pietismus. 1. Aufl. 1954. 2., ergänzte Aufl. Tübingen. Niemeyer. 1968.

Quelle: Biblisch: Gott als lebendige Quelle. Das ist auch die pietistische Grundbedeutung. (S.319/S.320) Quellbrunnen ... quellen (S.320/S.321) Gott als Brunnen ... Brunnquell = Gott.

8) „Patmos" 1.Fas. Str.1. V.1-2: StA 2. 165.

Nah ist

Und schwer zu fassen der Gott.

9) „Andenken" 4.Str. V.38-39: StA 2. 189 (V(1)3).

10) „Brod und Wein" 4.Str. V.55-64: StA 2. 91-92.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,

Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?

Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,

Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!

Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,

Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang?

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?

Delphi schlummert und wo tönet das große Geschik?

Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll

Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?

11) Wieland „Griechische Erzählungen" (1784): „Comische Erzählungen" (1764), Das Urteil des Paris' V.271-285: Werke. Meyers Klassiker=Ausgaben. 4 Bde. Hrsg.: Klee, Gotthold. 1900. Bd.2. S.187.

Kaum ist er weg, so steht schon Cypria

Voll Zuversicht, in diesem Streit zu siegen,

In jenem schönen Aufzug da,

Worin sie sich (das lächelnde Vergnügen

Der lüsternen Natur) dem leichten Schaum entwand, 275

Sich selbst zum erstenmal voll süßen Wunders fand

Und, im Triumph auf einem Muschelwagen

In Paphos reizendes Gestad

Von frohen Zephyrn hingetragen,

Im ersten Jugendglanz die neue Welt betrat; 280

So steht sie da, halb abgewandt,

Wie zu Florenz, und deckt mit einer Hand,

Errötend in sich selbst geschmieget,

Die holde Brust, die kaum zu decken ist,

Und mit der andern — was ihr wißt. 285

- Mein Gott / mein Gott / warumb hastu mich verlassen: ...  
 Vgl. „Euangelium Mattheus“ 27. 46 (V(1)14).
- 18) Biblia Hebraica Stuttgartensia (V(1)14). S.746: „Jesaia“ 45. 15.  
 אל קוֹתֵר
- 19) Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1969, 1983. Tomus II. S.1144: Isaias Propheta. 45. 15.  
 vere tu es Deus absconditus Deus Israhel salvator
- 20) Biblia Germanica 1545 (V(1)7). „Der Prophet Jesaia“ XLV. 15. S.XXV.  
 FVRwar du bist ein verborgen Gott / du Gott Israel der Heiland.
- 21) „Brod und Wein“ 8.Str. V.129-132: StA 2. 94.  
 Als erschien zu lezt ein stiller Genius, himmlisch  
 Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand,  
 Ließ zum Zeichen, daß einst er da gewesen und wieder  
 Käme; der himmlische Chor einige Gaaben zurück,
- 22) Vgl. V(1)21.
- 23) „Emilie vor ihrem Brauttag“ V.29-31: StA 1. 278.  
 Der, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke,  
 Verborgenvirkend über seiner Welt  
 Mit freiem Auge ruht,
- 24) Takahashi: „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(1)12).  
 [III] „Gott der Mythe“ (10) „Die tiefste Innigkeit“ (Bd.35. S.2-14).
- 25) Augustinus „Confessiones“ XIII. 38: Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart. Teubner. 1934(1.Aufl.). 2.Aufl. 1969. S. 371.  
 nos requieturos in tua grandi sanctificatione speramus. tu autem bonum nullo indigens bono semper quietus es, quoniam tua quies tu ipse es.
- Vgl. „Confessiones/Bekenntnisse“ (Lateinisch/Deutsch). Übers.: Bernhart, Joseph. München: Kösel. 1955. S.841/S.843.  
 Wohl, auch bei uns gibt es gute Werke, gut als Gabe von Dir, gleichwohl nicht Werke von ewiger Dauer, da wir nach ihrem Vollbringen zu ruhen hoffen an Deinem erhabenen Weihetag: Du aber, Gut, das keines Gutes bedarf, bist immer ruhevoll, denn Du bist Deine Ruhe selber.
- (2) „BRUNNEN“
- 1) „Brod und Wein“ 1.Str. V.9-10: StA 2. 90 (V(1)2).  
 Vgl. Schmidt: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“ (V(1)1) S.35 / S.42.  
 das Abbild des Lebens selbst, der „immerquillende“ Brunnen, welcher vom steten Werden und vom steten Vergehen spricht; die Glocken, deren Tönen den großen Puls der Zeit erfüllen läßt. – Zwei Hauptmotive der romantischen Poesie, das der Ferne und das des Verfließens der Zeit, sind in der zweiten Distichentrias in seltner Reinheit verkörpert. (S.35)  
 die dunklen, mit Nasal verbundenen u-Laute („und die Brunnen“) geben von der geheimnisvollen Tiefe der Brunnen Kunde, die hellen i-Laute („Immerquillend und frisch“), teilweise intensiviert durch nachfolgende Doppelnasale und Liquida, von ihrem lebendigen Sprudeln. (S.42)
- 2) Biblia Germanica 1545 (V(1)14). „I. Buch Mose“ XXVI. 19. S. XV.  
 Auch gruben Isaacs knechte im grunde / und funden daselbs einen Brun lebendiges wassers.
- Vgl. „Ev. Joh.“ 4. 14: Biblia Germanica 1545. S.CCXCIX.  
 ein Brun des wassers... /das in das ewige Leben quillet.

Gott die Kreaturen erschuf. Und wenn ich alle Schriften durchgründe, soweit meine Vernunft es zu leisten und soweit sie zu erkennen vermag, so finde ich nichts anderes, als daß lautere Abgeschlossenheit alles übertreffe, denn alle Tugenden haben irgendein Absehen auf die Kreatur, während Abgeschlossenheit losgelöst von allen Kreaturen ist.

Vgl. Heidegger „Die Sprache im Gedicht“ 1953: „Unterwegs zur Sprache“ Pfullingen. Neske. 5. Aufl. 1975. S. 52.

Alles Sagen der Dichtungen Georg Trakls bleibt auf den wandernden Fremdling versammelt. Er ist und er heißt «der Abgeschiedene». Durch ihn hindurch und um ihn her ist das dichtende Sagen auf einen einzigen Gesang gestimmt. Weil die Dichtungen dieses Dichters in das Lied des Abgeschiedenen versammelt sind, nennen wir den Ort seines Gedichtes die Abgeschlossenheit.

Vgl. Trakl „Sebastian im Traum“ (1914) „Gesang des Abgeschiedenen“: Dichtungen und Briefe. Salzburg. Otto Müller. 1969/1970. 3. Aufl. 1974. S. 78-79.

14) Bach „Matthäus-Passion“ Urtextausgabe auf der Grundlage der Neuen Ausgabe sämtlicher Werke' hrsg. vom Johann-Sebastian-Bach-Institut Göttingen und vom Bach-Archiv Leipzig (Serie II. Bd. 5) Kassel. Bärenreiter-Verlag / Ongaku-no-Tomo=Sya. 1973 / 1976. Nr. 71 (BWV) Rezitativ. S. 252-254.

Evangelista Und von der sechsten Stunde an war eine Finsternis über das ganze Land bis zu der neunten Stunde. Und um die neunte Stunde schrie Jesus laut und sprach: Jesus Eli, Eli, lama lama, asabthani? Evangelista Das ist: Mein Gott, mein Gott, warum hast du mich verlassen? Etliche aber, die da stunden, da sie das hörten, sprachen sie: Chorus Der rufet dem Elias! Evangelista Und bald lief einer unter ihnen, nahm einen Schwamm und füllte ihn mit Essig und steckte ihn auf ein Rohr und tränkete ihn. Die andern aber sprachen: Chorus Halt! halt! laß sehen, ob Elias komme und ihm helfe? Evangelista Aber Jesus schrie abermal laut, und verschied.

Vgl. Novum Testamentum graece et latine (V(1)7). S. 80. ἡλι ἡλι λευα σαβαθανι; ...

A sexta autem hora tenebrae factae sunt super universam terram usque ad horam nonam. Et circa horam nonam clamavit Iesus voce magna, dicens: Eli, Eli, lamma sabachthani? hoc est: Deus meus, Deus meus ut quid dereliquisti me? ...

Vgl. Biblia Germanica. 1545 (V(1)7). „Euangelium Mattheus“ 27. 46. S. CCLXIII.

Vnd vmb die neunde stunde schrey Jhesus laut / vnd sprach / Eli / Eli / lama asabthani? Das ist / Mein Gott / mein Gott / Warumb hastu mich verlassen? ...

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967/77, 1984. S. 1104: „Psalmi“ 22. 2.

אלי אלי למה עזבתני

Vgl. Klopstock „Der Messias“ 10. Gesang. V. 1030 (Altonaer Ausgabe 1780): Ausgewählte Werke. Hrsg.: Schleiden, Karl. München. Hanser. 1962. S. 443.

Mein Gott! mein Gott! warum hast du mich verlassen?

15) Seisyo. Nihon-Seisyo-Kyokai. Kyuyaku-Seisyo. 1955. S. 764.

16) Seisyo (V(1)15). Shinyaku-Seisyo. 1954. S. 48.

17) Biblia Germanica 1545 (V(1)7). „Der Psalter“ XXII. 2. S. CCXCIII.

Spes autem, quae videtur, non est spes: nam quod videt quis, quid sperat? Si autem quod non videmus, speramus: per patientiam expectamus.

Vgl. Biblia Germanica. 1545. Lutherbibel. Faksimile-Neudruck. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967, 1983. „An die Römer“ 8. 24-25. S.CCCXXXIX.

Die Hoffnung aber / die man sihet / ist nicht hoffnung /  
Denn wie kan man hoffen / das man sihet: So wir aber des  
hoffen / das wir nicht sehen / So warten wir sein durch  
gedult.

8) Brief 172 an den Bruder. 1.1.1799: StA 6. 305.

... was die Kunst, und besonders die Poësie, ihrer Natur nach, ist. ... Denn alsdann sammelt sich der Mensch bei ihr, und sie giebt ihm Ruhe, nicht die leere, sondern die lebendige Ruhe, wo alle Kräfte regsam sind, und nur wegen ihrer innigen Harmonie nicht als thätig erkannt werden.

9) „Die Launischen“ 1.Str. V.1-2: StA 1. 298.

Hör' ich ferne nur her, wenn ich für mich geklagt,  
Saitenspiel und Gesang, schweigt mir das Herz doch gleich;

10) „Heimkunft“ 2.Str. V.21-24: StA 2. 96.

Und noch höher hinauf wohnt über dem Lichte der reine  
Seelige Gott vom Spiel heiliger Stralen erfreut.  
Stille wohnt er allein und hell erscheint sein Antlitz,  
Der ätherische scheint Leben zu geben geneigt,

11) Vgl. V(1)10.

12) Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“ (Forschungsberichte der Universität Kochi fürs Jahr 1984/1985/1986. Geisteswissenschaften. Vol.33. S.13-72 / Vol.34. S.1-72 / Vol.35. S.1-66. 1985/1986/1987). [III] „Gott der Mythe“ (1) „Innigerer Flug“ (Vol.34. S.22-24).

13) Eckhart: Die deutsche Werke. Hrsg. u. Übers.: Quint, Josef. Stuttgart. Kohlhammer. Bd.5: Traktate. S.400-437: „Von abegescheidenheit“. S.400-401.

Ich hân der geschrift vil gelesen, beidiu von den heidenischen meistern und von den wîssagen und von der alten und niuwen ê, und hân mit ernste und mit ganzem vilze gesuochet, welhiu diu hoehste und diu beste tugent sî, dâ mite der mensche sich ze gote allermeist und aller naehest gevüegen müge und mit der der mensche von gnâden werden müge, daz got ist von natûre und dâ mite der mensche aller glîchest stande dem bilde, als er in gote was, in dem zwischen im und gote kein underscheit was, ê daz got die créatûre geschuof. Und sô ich alle die geschrift durchgründe, als verre mîn vernunft erziugen und bekennen mac, sô envinde ich niht anders, wan daz lûteriu abegescheidenheit ob allen dingen sî, wan alle tugende hânt etwaz ûfsehennes ûf die créatûre, sô stât abegescheidenheit ledic aller créatûren.

Vgl. „Von Abgeschiedenheit“ (S.539-547) S.539.

Ich habe viele Schriften gelesen sowohl der heidnischen Meister wie der Propheten, des Alten und des Neuen Testaments, und habe mit Ernst und mit ganzem Eifer danach gesucht, welches die höchste und die beste Tugend sei, mit der sich der Mensch am meisten und am allernächsten Gott verbinden und mit der der Mensch von Gnaden werden könne, was Gott von Natur ist, und durch die der Mensch in der größten Übereinstimmung mit dem Bilde stände, das er in Gott war, in dem zwischen ihm und Gott kein Unterschied war, ehe



## QUELENNACHWEIS

## [V] VON DER ABENDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT

## (1) „ABGESCHIEDENHEIT“

1) Hölderlin „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-6: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Kohlhammer. 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.90 (=StA 2. 90).

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,  
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.  
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,  
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt  
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5  
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin. Gruyter. 1968. S.35 / S.41.

... ,bleibt der Wertbereich des geschäftigen Lebens doch abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens, ist beschränkt, noch nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt.

Später wird im Gedicht nicht mehr von den „Freuden des Tags“, sondern von der ganz anders gearteten dionysischen Freude in nächtlicher Zeit die Rede sein. (S.35)

In der zweiten Distichentrias nun, die nach dem Abklingen des Taglebens in der ersten ein Aufklingen des tieferen Lebens bringt, tritt zunächst eine deutlich kontrastierende Umkehrung in der Stellung der Subjekte ein: ... (S.41)

2) „Brod und Wein“ 1.Str. V.7-10: StA 2. 90.

Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß  
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann  
Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen  
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10

3) „Andenken“ 4.Str. V.37-39: StA 2. 189.

Wo aber sind die Freunde? Bellarmin  
Mit dem Gefährten? Mancher  
Trägt Scheue, an die Quelle zu gehn;

4) „Brod und Wein“ 9.Str. V.155-160: StA 2. 95.

Aber indessen kommt als Fakelschwinger des Höchsten  
Sohn, der Syrier, unter die Schatten herab.  
Seelige Weise sehns; ein Lächeln aus der gefangnen  
Seele leuchtet, dem Licht thauet ihr Auge noch auf.  
Sanfter traumt und schläft in Armen der Erde der Titan,  
Selbst der neidische, selbst Cerberus trinket und schläft.

5) „Hyperions Schiksaalslied“ 3.Str. V.16-24: StA. 3. 143.

Doch uns ist gegeben,  
Auf keiner Stätte zu ruhn,  
Es schwinden, es fallen

Die leidenden Menschen

Blindings von einer

Stunde zur andern,

Wie Wasser von Klippe

Zu Klippe geworfen,

Jahr lang ins Ungewisse hinab.

6) Dante „La Comedia“ (1472) „Inferno“ Canto III. V.9: Le Opere di Dante. Firenze. Società Dantesca. 2.Aufl. 1960. S.452.

Lasciate ogni speranza, voi ch'entrate.

7) Biblia. Novum Testamentum graece et latine. Stuttgart.

Württembergische Bibelanstalt. 1930 S.407: „Ad Romanos“ VIII.

ἐλπίς δὲ βλέπομένη οὐκ ἔστιν ἐλπίς· ὁ γὰρ βλέπει τὴν, τὴ καὶ ἐλπίζει; εἰ δὲ ὁ οὐ βλέπομεν ἐλπίζομεν, οὐ ὑπομονῆς ἀνεκδέχομεθα. (Epistola Pauli ad Romanos: 8. 24-25)

Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen 9  
 Immerquillend ..... 10  
 („Brod und Wein" 1.Str.: V(1)2)

Ähnlich wie Orpheus ins Schattenreich eintaucht, um seine verstorbene Geliebte wieder zur Welt zurückzurufen, „gedenkt" hier „ein liebend" „einsamer Mann" in „Abgeschiedenheit" „ferner Freunde und der Jugendzeit".

Ein Vorbild solch einer „lauteren Abgeschiedenheit" verkörpert Christus, der „verborgenwirkende" „stille Gott"(V(1)23) von Hölderlins „Brod und Wein":

Und die neunte Stunde schrie Jesus laut und sprach:  
 Eli, Eli, lama asabthani?  
 Das ist:  
 Mein Gott, mein Gott, warum hast du mich verlassen?  
 („Evangelium des Matthäus" 27. 46: „Matthäus-Passion" II. Teil.  
 Nr.71: V(1)14)

Der „verborgene Gott (Deus absconditus)"(V(1)19) verließ Jesum Christum in „lauterer Abgeschiedenheit".

Der „liebend" „einsame Mann"(V.8), der gleichsam dem „stillen Gott" im Leben und Leiden nachfolgt, kann nicht in den Genuß der „Ruhe" kommen, wie seine Umgebung:

Rings um ruhet die Stadt; ..... 1  
 ..... 2  
 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen, 3  
 ..... 4  
 Wohlzufrieden zu Haus; ..... 5  
 ..... ruht der geschäftige Markt. 6  
 („Brod und Wein" 1.Str.: V(1)1)

Er sucht wohl eher jene „Ruhe(quies)" Gottes in „lauterer Abgeschiedenheit":

... nos quieturos in tua grandi sanctificatione speramus. Tu autem ... quietus es, quoniam tua quies tu ipse es. ...  
 (Augustinus „Confessiones" XIII. 38: V(1)25)

... wir ... zu ruhen hoffen an Deinem erhabenen Weihetag: Du aber ... bist immer ruhevoll, denn Du bist Deine Ruhe selber.

„Die hoffnung aber / die man sihet / ist nicht hoffnung / Denn wie kan man des hoffen / das man sihet: So wir aber des hoffen / das wir nicht sehen / So warten wir sein durch gedult."(Paulus „An die Römer" 8. 24f.: V(1)7)

In solcher Hoffnung in „lauterer Abgeschiedenheit" „rauschen die Brunnen immerquillend"(V.9), „heilige Symbole des ewigen Lebens in der Natur"(V(2)40). An einem Feiertag gesellt sich zu diesem „immerquillenden Rauschen" der „Brunnen" auch „der Gemeinde schauerlicher Gesang" im Akkord mit „der herrlichgestimmten Orgel im heiligen Saal"(V(2)38):

Am Feiertag ..... 16  
 ..... und helle quillten lebendige Brunnen. 17  
 Fern rauschte der Gemeinde schauerlicher Gesang, ..... 18  
 Wo heiligem Wein gleich, ..... 19  
 („Versöhnender der du nimmergeglauht ... " 1.Fas. 2.Str.: V(2)32)

Wenn es in „Brod und Wein" heißt: „... ruht der geschäftige Markt"(V.6), so geht es um einen gewöhnlichen Feierabend, wo „die Menschen"(V.3) nicht etwa in eine Kirche, einen „heiligen Saal" gehen, sondern „wohlzufrieden zu Haus"(V.5) „ruhen"(V.3), und wo sich in einer „liebend" „einsamen" Seele der „Brun lebendiges wassers" als „heilige Symbol des ewigen Lebens in der Natur" auf tun kann.

## „ABGESCHIEDENHEIT" UND „BRUNNEN"

## Zum Verständnis dieser Arbeit

In „Hölderlins Elegie „Brod und Wein“" (1968) hält Jochen Schmidt das alltägliche Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein" (V.1-V.6) für einen „Wertbereich des geschäftigen Lebens": Er sei „abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens" und „noch nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt". Erst in der zweiten Distichentrias (V.7ff.) findet Schmidt „nach dem Abklingen des Taglebens in der ersten ein Aufklingen des tieferen Lebens" (V(1)1). Im Gegensatz zu dieser dualistischen Lesart, die zwischen V.6 und V.7 nur einen Spalt öffnet, möchte ich dazwischen auch einen inneren Zusammenhang berücksichtigen.

Schon in der bescheidenen „Erleuchtung" der bürgerlichen Sphäre am Abend: „still wird die erleuchtete Gasse" (V.1) richtet sich die vom Mondschein und Lampenlicht „erleuchtete" Seele auf ihre geistige Heimat: „Seeliges Griechenland!" (V.55:V(2)10). Diese seelische „Erleuchtung" im bürgerlichen Bewußtsein steht der prächtigen „Beleuchtung" der privilegierten Hautevolee gegenüber: „Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg" (V.2), die zur luxuriösen Abendgesellschaft fahren. Hier im ruhig dahinflutenden und wieder verebbenden Distichon des gedankenlyrischen Anfangs vollzieht sich das „stille" „Werden" eines „erleuchteten" Bürgertums im ersten Vers bemerkenswerterweise im Einklang mit dem „Vergehen" der symbolischen „Wagen" der feudalen Hautevolee im zweiten Vers: „Das Werden im Vergehen" (V(2)27).

Danach prägt sich auch das „Werden" der „immerquillend rauschenden" „Brunnen" (V.9f.) unter der Voraussetzung des „Vergehens" der „hinweg-rauschenden" „Wagen" (V.2) aus:

Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg. 2

... und die Brunnen 9

Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10

(„Brod und Wein" 1.Str.: V(1)1 / V(2)1)

Das Verb „rauschen" macht durch seine Zusätze das „Werden im Vergehen" sehr anschaulich: „rauschen ... hinweg" (V.2) / „Immerquillend ... rauschen" (V.10).

Der Kontrapunkt der beiden Verse bestätigt sich auch mit dem Parallelismus ihrer anderen Vorstellungen:

|              |   |                     |
|--------------|---|---------------------|
| „mit Fakeln" | ↔ | „an duftendem Beet" |
| „geschmückt" | ↔ | „frisch"            |
| „die Wagen"  | ↔ | „die Brunnen"       |

Das „hinwegrauschende" „Vergehen" der künstlichen Dinge des zweiten Verses kontrastiert mit dem „immerquillend rauschenden" „Werden" der Natur. Während die kunstvoll „geschmückten" „Wagen" zu einer luxuriösen Abendgesellschaft der Privilegierten „hinwegrauschen", „rauschen" die Brunnen aus dem „vaterländischen und natürlichen" (V(2)39) Erdboden „immerquillend und frisch", ähnelnd dem „Brun lebendiges wassers" („Genesis" 26. 19: V(2)2).

Der ursprüngliche Grund von solchem „Brun lebendiges wassers" findet sich wohl in der „lauteren Abgeschiedenheit (lütériu abegescheidenheit)" (V(1)13) einer „liebend" „einsamen" Seele:

Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß 7  
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann 8

## ÜBER DIE ERSTE STROPHE VON HÖLDERLINS „BROD UND WEIN“:

,HEILIGE NACHT' DRITTER TEIL:

„ABGESCHIEDENHEIT" UND „BRUNNEN"

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KOCHI (JAPAN)

FÜRS JAHR 1987. VOL.36. GEISTESWISSENSCHAFTEN

## INHALT

|                                                                                            |                       |           |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|-----------|
| [I] EINLEITUNG                                                                             | (Vol.34. S.156-S.159) | S. 2-S. 5 |
| [II] „RINGS UM RUHET DIE STADT"                                                            |                       |           |
| (1) Stabreim und Versfuß                                                                   | S.160-S.161)          | S. 6-S. 7 |
| (2) Verinnerlichung                                                                        | S.162-S.165)          | S. 8-S.11 |
| (3) „Die lebendige Ruhe"                                                                   | S.165-S.169)          | S.11-S.15 |
| [III] „ERLEUCHTUNG UND BELEUCHTUNG"                                                        |                       |           |
| (1) „Das Werden im Vergehen"                                                               | S.170-S.171)          | S.16-S.17 |
| (2) Lampenlicht und Mondschein                                                             | S.171-S.176)          | S.17-S.22 |
| (3) „Gährung und Auflösung"                                                                | S.176-S.182)          | S.22-S.28 |
| [IV] „EIN SINNIGES HAUPT"                                                                  |                       |           |
| (1) Vorwort                                                                                | (Vol.35. S. 68-S. 69) | S.29-S.30 |
| (2) Christian Landauer                                                                     | S. 69-S. 74)          | S.30-S.35 |
| (3) „Landauersche Fußteppiche- und<br>Wollwarenhandlung"                                   | S. 74-S. 77)          | S.35-S.38 |
| (4) Gemeingeist und Alleinherrschaft                                                       | S. 77-S. 81)          | S.38-S.42 |
| (5) Schlußwort                                                                             | S. 81-S. 83)          | S.42-S.44 |
| [V] VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT                                              |                       |           |
| (1) „Abgeschiedenheit"                                                                     | (Vol.36. S. 16-S. 21) | S.45-S.50 |
| (2) „Brunnen"                                                                              | S. 21-S. 27)          | S.50-S.56 |
| (3) „Glocken" und „Stunden"                                                                |                       |           |
| (4) „Hain" und „Bund"                                                                      |                       |           |
| a) „Wehn"                                                                                  |                       |           |
| b) „Hain" und „ein eueriger Gott"                                                          |                       |           |
| c) Vom Urgrund zum Ursprung                                                                |                       |           |
| d) „Auge der Seele" und „Seelengesang"                                                     |                       |           |
| e) „Die Eiche weht"                                                                        |                       |           |
| f) „Tausendjährige Eichen"                                                                 |                       |           |
| g) „Idyllische Wirklichkeit" und „sittliche Größe"                                         |                       |           |
| h) „Der leere Verstand"                                                                    |                       |           |
| i) „Hingehefteten Blickes lange Wahl"                                                      |                       |           |
| j) „Die flüchtigen Dichter"                                                                |                       |           |
| k) „Hainbund"                                                                              |                       |           |
| l) „Bund"                                                                                  |                       |           |
| m) „Heiliger Barbar"                                                                       |                       |           |
| n) „Anmuth und Würde"                                                                      |                       |           |
| o) „Das Musikalische"                                                                      |                       |           |
| p) „Idealisierkunst"                                                                       |                       |           |
| q) „Ein Bund der konservativen Kulturidee mit<br>dem revolutionären Gesellschaftsgedanken" |                       |           |
| (5) Eleusis                                                                                |                       |           |

## QUELENNACHWEIS

Zum Verständnis dieser Arbeit